

第2回 野川流域連絡会

議事要旨

日時：平成16年4月16日（金）18時～20時30分
場所：調布市分科会館たづくり（12階大会議室）

次第

- 1 開会
- 2 座長挨拶
- 3 講演「野川の植物」
- 4 全体会
- 5 分科会
- 6 その他
- 7 閉会

1 開会

野川流域連絡会の事務局である、東京都北多摩南部建設事務所工事第二課の司会で、開会が宣言された。

2 座長挨拶

座長から、「昨年11月の「第1回野川流域連絡会」以降、今年1月と2月に「野川現場見学会」を2回行い、今後は分科会に分かれてより細かい議論をしていこうということになった。今日この後、分科会ごとに討議を行っていただくのでよろしくお願ひしたい」と挨拶があった。

また、4月1日付で人事異動があった関係で、東京都北多摩南部建設事務所長および野川流域連絡会の行政委員（世田谷区道路整備部土木調整課長、同砧総合支所街づくり部土木課長、調布市環境部環境保全課長、同環境部下水道課長、三鷹市都市整備部道路交通課長、府中市都市建設部管理課長、小金井市都市建設部下水道課長、国分寺市都市建設部都市計画課長、東京都北多摩北部建設事務所工事第二課長）に変更があった。

次に、事務局から、「水量」、「水質」、「生きもの」の分科会分けについて、「委員全員にアンケート調査または電話にて希望をとり、案として所属する分科会を決めさせていただいたが、本日の討議を通じて、他の分科会に移っていただいても構わない。本日の閉会時に分科会分けを完了したいと思っている」と説明があった。

3 講演「野川の植物」

都民委員から、スライドを交えて「野川の植物」と題した講演があった。

●野川の湧水

- ・国分寺崖線の上はすっかり住宅街になってしまい、湧水が減少している。
- ・東京経済大学内にある「新次郎池」は、雨が降らないと涸れてしまう。現在はまったく流れていない。
- ・小金井の滄浪泉園の湧水も、現在はほとんど止まってしまっている。

- ・最近雨が降らないので、小金井の谷口邸の湧水も涸れかけている。
- ・小金井の中村記念美術館のところからも湧水が出ているが、これも現在は涸れていて、野川まで流れていない。
- ・小金井の貫井神社の湧水は今まで涸れたことがない。他の湧水がみな涸れてしまっても、ここだけは残って流れている。
- ・貫井神社付近の野川に、以前ホウライシダがあった。湿ったところに生えるシダ植物で、都内ではたいへん珍しいので、残してもらっていたが、いつの間にか消えてしまった。
- ・貫井神社の湧水が小さな水路をつくり、周辺にいろいろな動植物が生息している。このような水路が、野川の豊かさをつくるひとつの基盤になると思う。
- ・湧水が野川に流れる水路沿いの遊歩道が、小金井にはあちこちにある。
- ・二枚橋上流の第一調節池沿いにある側溝から、野川に水が溢れている。この側溝の水は僅かな量だが、今まで涸れたことがない。貫井神社とこの二箇所以外の湧水は、雨が降らないと涸れてしまう。やがてここに「どじょう池」をつくることになった。

●小金井の野川

- ・野川流域において、小金井地区にはその他と比べて河川敷周辺に植物が多く、約 200 種類以上ある。植生が豊かで、人工の川とは思えない、天然の川のような場所もある。
- ・「どじょう池」は、子どもたちもみんな協力して池を掘り、北南建がビニールシートを敷いて、粘土張りをして、完成した。
- ・どじょう池には自由に入れる。絶えず子どもたちがやって来て、水遊びを楽しんでいる。そういう環境をつくるのが子どもたちにとって教育になるだろうと、柵などは設けていない。
- ・湧き水を守る会もあって、毎月一回どじょう池の清掃をして、きれいに保っている。
- ・この付近の野川も岸辺の斜面が緩やかで、川の中に自由に入って子どもたちが遊べるようになっている。こういう環境があるので、植物や生態系が豊かなのだと思う。切り立った崖のようになっていたら、植物の種類もぐっと少なくなってしまうだろう。これが小金井の野川の特徴のひとつにだと思ふ。下流端までこういう状態だと良いのだが…。
- ・三鷹付近になると、川の中を歩く人は少なくなり、植物の種類もぐっと少なくなる。こういう状態が多摩川に合流する二子玉川まで続いている。
- ・かつて野川には田んぼがつくられ、農家の人たちが草刈りをしていたが、昭和 45 年頃に田んぼはなくなった。現在の野川からは想像がつかない。

●水涸れ

- ・最近の野川はよく水涸れをおこす。平成 11 年頃などは毎年のように水涸れをおこし、春から夏にかけて、川底を人が歩ける状態になってしまった。下流側には水があるが、小金井周辺では水がなく、生物の隠れ場所もなくなってしまった。水のない野川は川とはいえない。
- ・今年 3 月 6 日に「野川ほたる村」で水生生物の観察会をしたとき、すでに二枚橋周辺の野川は水涸れしていた。小金井新橋では水生生物がとれたが、すぐ 50m ほど下流には水がなかった。3 月 15 日頃には、小金井新橋でも完全に水が涸れていた。
- ・そのとき、「真姿の池」の湧水は僅かながらも流れていたが、その小川は、一里塚橋で野川に合流するところまで流れてきていなかった。
- ・また「姿見の池」は、普段は手前の湿地も水浸しになっているのだが、僅かに水がたまっている程度で、池からの水路は完全に涸れていた。ここには武蔵野線のトンネル地下水をポンプアップして流しているが、つまり下流で水が欲しいときには、上流にも水がないという状態である。
- ・水涸れの緊急の対策として私が考えたのは、野川のあちこちを少し深く掘って、水たまりをつくっておくこと。水生生物はそこで生き永らえることができる。あちこちに井戸

を掘って野川に流すという方法もあると思う。

●野川の桜

- ・ソメイヨシノはエドヒガンとオオシマザクラとを掛け合わせたもので、野川にもたくさんある。
- ・ソメイヨシノはテングス病などがつきやすく、「第1回現場見学会」で日立中央研究所のソメイヨシノにテングス病がたくさんついていたので、研究所の人に、病気になった枝を焼き払うように伝えた。あのまま放っておいたら、研究所内のソメイヨシノは枯れてなくなってしまう可能性がある。
- ・シダレザクラはエドヒガンの枝が枝垂れたもので、八重のものもある。花の萼筒がふくらんでいるのがエドヒガン系の桜の特徴。エドヒガンそのものは野川周辺にはない。
- ・八重のサトザクラとしては、「鬱金(うこん)」や「関山(かんざん)」などがある。
- ・武蔵野公園には様々な桜があり、オオカンザクラやオオヤマザクラ、ウワミズザクラなども見られる。
- ・イヌザクラはウワミズザクラに似ているが、花穂の付き方が違う。
- ・桜はたいへん種類が多い。野川の周辺にソメイヨシノ以外にいろんな桜を植えていくと楽しめると思う。

●野川の草花

- ・小金井地区の野川にネナシカズラがある。10年以上前から毎年出ているが、都会では珍しいので、北南建にお願いして、草刈りのときに残してもらっている。
- ・小金井の第一調節池には、夏から秋にかけてナンバンギセルが出る。おもしろい形をしているので、大勢の人が写真を撮りに来る。
- ・二枚橋周辺には、10年ほど前からウキヤガラが出はじめた。これも北南建にお願いして刈り取らないようにしてもらったところ、かなり増えてきた。
- ・第一調節池にはミゾコウジュもあるが、危急種に指定されている植物で、いつ消えてしまうかわからない。
- ・野川にはオオブタクサがひじょうに多い。葉にブタクサハムシがたくさんついて、葉を食べるが、もしこれがいなかったら、オオブタクサはもっと大繁殖してしまうだろう。
- ・オオイヌノフグリやタチイヌノフグリは帰化植物で、野川でもたくさん見られるが、日本在来のイヌノフグリは、山間部に行ってもほとんど見ることができなくなった。
- ・クズは枯れた冬に観察すると、葉痕の模様が顔のようで面白い。
- ・オギは茎が長く、穂が短い。ススキは穂が長く、茎は短い。穂を見てノギが突っ立っているのがススキで、白い毛ばかりなのがオギ。
- ・ハマダイコンはショカツサイに似ているが、葉に柄がついている。
- ・ショカツサイはオオアラセイトウ、ムラサキハナナ、小金井ではムラサキダイコンとも呼ばれている。
- ・スマレは絶えず工事をしたり、人が攪乱しているようなところには育たず、野川には少ない。周りに背の高い下草が育ってきても消えてしまう。
- ・三鷹の大沢の田んぼにはコオニタビラコがある。春の七草のひとつで食べられる。花びらが10枚くらいと少ないのが特徴。
- ・ヤブタビラコやオニタビラコは野川のあちこちで見られる。
- ・最近、カントウタンポポとセイヨウタンポポが交雑して、総苞片が反り返らず中途半端になった雑種が問題になっているが、これが野川の周辺にも増えてきている。
- ・ヤセウツボはマメ科、キク科などの植物に寄生する外来の寄生植物。
- ・もともとセキショウを漢名で菖蒲と呼び、菖蒲湯に使うショウブは白菖と呼ばれていた。
- ・ヒメガマは雄花と雌花が離れている。大国主命がガマの雄花を敷いて火傷したウサギを救った話は有名。

- ・ヨメナは小金井の野川には残っているが、他の地区ではほとんど見られない。これが見たさに、周りの雑草を抜いている人もいた。
- ・秋にチカラシバの群落が露に濡れた風景は美しく、大勢の人が写真を撮りに来る。
- ・三鷹の大沢の湿地帯にはタコノアシがあったが、現在はない。絶滅危惧にまではなっていないが、小金井では消えてしまった。
- ・ゲンノショウコは種が熟すとその形が神輿のようなので、ミコシグサとも呼ばれている。

4 全体会

(1) これまでの活動報告

事務局から、第二期野川流域連絡会のこれまでの活動報告があった。

- ・平成15年11月7日に「第1回野川流域連絡会」が開催され、第二期がスタートした。
- ・平成16年1月28日に「第1回現場見学会」を行い、姿見の池、日立中央研究所、お鷹の道、一里塚橋付近など、野川上流部の現地見学をした。
- ・平成16年2月28日に「第2回現場見学会」を行い、多摩川への合流点の兵庫橋から、上流に向けて神明橋まで歩き、最下流部の工事現場や次大夫堀公園など、野川下流部の現地見学をした。

(2) アンケートの調査結果

事務局から、「第1回野川現場見学会」のときに配布して、委員全員に記入をお願いした、野川流域連絡会の進め方についてのアンケート結果について、設問ごとに主なものが紹介された。

●「あなたの考えている望ましい野川とは、どんな川ですか」

- ・自然ばい川の風景が残り、訪れたときに心からほっとできるいこいの場。
- ・たくさんの生きものと共存できる川、子どもたちの楽しそうな声のする川。
- ・自然豊かな美しい川。
- ・新たな川づくりのモデルになるような川。
- ・子どもたちが水に入りたいと思う川、簡単に水に入れ、水辺を楽しむことができる川。
- ・アユが溯上できる川。
- ・ゴミなどのない清潔な川。
- ・子どもたちが水遊びできる程度の水質と水量を保ち、かつ流域の緑が保たれ、市民の憩いの場であると同時に、生物が豊富であること。
- ・市民が散策し、心が癒されるような野川。
- ・ビオトープネットワークの基軸となる野川、流域住民が協力して自然の素晴らしさを学ぶことができる野川。
- ・釣りができる川、泳げる川、淵と瀬のある川。
- ・“川はみんなのもの”と感じられる川。

●「現在の野川の課題は何ですか」

- ・治水と環境保全とが、なかなかうまく両立できず、環境保全が後回しになっている感があること。
- ・世田谷部分の野川について、ほとんどの部分が鍵のかかったフェンスに囲まれ、水辺におりられない。ごみが多い。コイや野鳥に対してエサやりをしている。
- ・水涸れ対策、水量を増やす、湧水の保全施策をつくる、崖線緑地を守り回復する。
- ・野川は水量が少なく、湧水が減少している。玉川上水からの導水を含め、湧水地点の再確認と利用を考えるべきだ。下水処理場建設の件も検討課題だと思う。

- ・子どもの遊び場と犬の放し飼いと野鳥の飛来するエリアが一緒であり、まずい雰囲気がある。大雨でオーバーフローしたとき、下水汚水が流れ込むときがある。
- ・源流域の湧水の減少・枯渇しないように、崖線近くの地下水涵養域に高層マンションの建設を阻止する規制を行うこと。
- ・ごみ捨て等により損なわれた景観を取り戻す。
- ・大人だけでなく小学生や保育園児等、集団生活をしている子どもたちに水の大切さ、水のきれいさなどをじかに触れさせ、川の美しさと汚さない教育を徹底させて欲しい。
- ・国分寺市内の野川の三面張りを廃止改良をすべきである。
- ・下水道のオーバーフローの減少が必要である。
- ・野生の生態系を壊すような水生生物を放流しないような対策を考える。
- 「野川流域連絡会で取り組みたいテーマは何ですか」
- ・野川の自然環境をどう残していけるか。
- ・野川流域全体の自然再生、仙川との連携も必要。
- ・これまで各分科会で取り上げてきた事項を、総括的に再確認・検討して具体化する方向に進めるべきだと思う。
- ・下水処理場の問題を取り上げるべきである。
- ・川の構造について検討すべきである。
- ・水量の確保と周辺環境の保全。
- ・環境の浄化。
- ・玉川上水や砂川用水の活用。
- ・国分寺崖線の環境保全。
- ・流域の小中学校の教育の中に取り入れたい。
- ・生きものに配慮した河川構造。
- ・野川を基軸としたビオトープネットワーク。
- ・野川の新しい未来像を考える。水辺に気軽に近づけるような施策を考える。
- ・野川流域全体の美化運動など具体的な取り組みが必要。

設問「テーマについて討議・検討するため分科会方式を採用した場合、どこに所属して何をしたいですか」および「本日の現場見学会の感想をお願いします」については省略された。

(3) 成果の報告

はじめに、第一期で「生きもの分科会」の世話役を務めた団体委員から、『野川の生きものガイドブック』について説明があった。

- ・生きもの分科会の議論で、委員自身が野川の生きものについて勉強し、定期的に調査を続けていって、生きものからみた野川を考えていこうという話がきっかけになった。
- ・野川の生きものをずっと見ていくことで川を知ろうというのが目的。
- ・例えばユリカモメは、このガイドブックをつくった当時は下流部にかなりいたが、今はいない。これは世田谷区でコイや鳥にパン屑をやるのを禁止したから。
- ・生きものといってもひじょうに種類が多いので、水生生物、植物、鳥について、25種類くらいずつ、指標になりそうな生きものをピックアップし、写真を集めて編集した。
- ・ガイドブック作成の経緯についての説明を掲載していなかったもので、増刷するときには付け加えたい。
- ・今後も修正を重ねながら、より良いガイドブックにしていきたい。

次に、第一期で「水量分科会」の世話役を務めた団体委員から、「湧水マップ」、「用水マ

ップ」、「水涸れマップ」について説明があった。

- ・第一期「水量分科会」の最大のテーマは水涸れであり、その対策について議論する中で、湧水、湧水の涵養域、用水路、玉川上水の分水路網などのマップをつくらうということになった
- ・これらのマップは、作業段階ではひじょうに大きな地図だったが、編集して見易くなった。今後議論しながら、加筆・修正を重ねていきたい。
- ・湧水の涵養域の扱いは難しいが、それについても議論していきたい。
- ・水涸れマップについては、その対策として、流域自治体の『都市マス』の整理など、野川に関する施策マップに発展させても良いと思う。
- ・用水マップは、シンプルに見えるが、各自自治体の水路網の地図を集めてつなぎ合わせ、それらの水路の現状はどうなっているのか、また今後はどんな予定なのかなどについて色分けしてつくった。膨大な作業を通して作成した分科会の財産であり、これを今後どのように活用していくかが大事な議論になる。地区別に細かく見ていく作業も必要だと思う。

また、「水質分科会」で検討・企画して実施した『野川の通信簿』が、第39回東京都公園協会賞の奨励賞を受賞した。これについて、第一期で「水質分科会」の世話役を務めた都民委員から説明があった。

- ・野川の通信簿は、国土交通省が中心になって推進している『川の通信簿』と違い、子どもたちや市民団体など多くの人たちが、水質だけでなく川の日常の変化や動植物など様々なデータをとって、その発表会をし、それを市民や行政の取り組みにフィードバックし、またフィールドワークをする、というように“しくみ”として動かしていこうと考えている。その考え方が評価していただけたのかもしれない。
- ・この通信簿を、昨年7月に小金井市の南小学校で子どもたち80名に参加してもらって実施したが、先生方にもひじょうに喜んでもらい、分科会だけでなく、委員の方、有志の方に手伝っていただいて、大成功だったと思う。これも賞の要因に入っていると思う。

5 分科会

「水量」、「水質」、「生きもの」の分科会（この時点では案）ごとに、自己紹介、まとめ役の選出、分科会での検討事項、進め方についてなどを議論（50分程度）した後、その結果を発表し合った。

（分科会ごとの議論）

- はじめに、団体委員から、「水量分科会」の議論内容が紹介された。
- ・水量が不足しているのは、どこにどういう問題があるのか。
- ・湧水が減少に関して、地下水の動向について科学的な調査がしたい。
- ・かつての野川の姿について、古老からの聞き取りを行いたい。
- ・「用水マップ」を加筆・修正しながら、用水路の活用について考えたい。
- ・水量不足の原因には、湧水の涵養域が狭くなっていることがあるのではないかと。浸透ますの設置や透水性舗装などに加えて、崖線上のマンションの規制なども考えていければ良い。
- ・流域の各自自治体間の共通認識が必要である。
- ・今年は上流部で水が涸れているが、中・下流は涸れていない。今までとは違う現象なので、科学的に調査できると良い。
- ・まだ議論していないのに、マップに今後のイメージ図を載せたのは行きすぎだ。修正す

る必要がある。

- ・まとめ役は神谷氏が継続。
- ・次回の分科会は5月28日に行う。

続いて、都民委員から、「水質分科会」の議論内容が紹介された。

- ・まとめ役は藤崎氏が継続し、倉持氏（市民側）、野崎氏（行政側）が補佐する。
- ・今後、分科会を月に1回程度開いていく。次回の日程は未定。
- ・今後のテーマとしては、下水のオーバーフローの問題、野川処理場の問題、上・中・下流の水質・環境の違いの問題、ゴミの問題、子どもが遊べる環境についてなど。それらのデータをとり、湧水の調査などもしたい。そのために『野川の通信簿』を活かしたい。

続いて、団体委員から、「生きもの分科会」の議論内容が紹介された。

- ・まとめ役は平井氏が継続し、杉山氏が補佐する。
- ・生きものは種類が多く、人によって価値観が大きく違う。それを通じて野川をどう考えていったら良いのかを議論し、いくつかの方向性が出た。
- ・野川の生きものについて好きだ嫌いの価値観ではなく、分科会で方向性を打ち出して、それを流域市民に広く知っていただき、それに対して返ってきた意見を含めて、更に良い野川をつくっていききたい。
- ・議論にあたっては、野川にいる大きなコイをどうしたら良いのか、野川の河川敷に生えている木の問題、木をどうするのか、切るのか切らないのかなど、具体的な例をとりあげて議論し、それに対して分科会として打ち出した方向性を外にアピールしていきたい。
- ・次回の日程は未定。

6 その他

東京都河川部から、野川の「河川整備計画」策定にむけた作業状況と今後の方針について説明があった。

- ・平成13年から野川の河川整備計画策定のための調査を開始し、以来、野川流域連絡会において何回かアンケート調査を行い、河川整備計画に関する意見をいただいていた。
- ・今年は具体的に河川整備計画の“たたき台”をつくって、流域連絡会に諮りたいと考えている。
- ・次回の全体会は11月頃に予定されているとのことなので、その前に希望される方に集まっていただいて、河川整備計画の勉強会を行いたい。
- ・その勉強会でたたいた案を、流域連絡会の全体会に報告するというかたちでやっていきたい。
- ・勉強会の人数については、イメージとして各分科会から3~4名くらい、それに行政を加えて20名くらいにしたいと考えている。
- ・第1回の勉強会は6月頃に開催したい。5月の連休早々に委員の皆さんにアンケートを郵送するので、関心のある方は希望していただきたい。
- ・4月の人事異動で河川部の野川の担当者が変わった。

これについて、団体委員から、「勉強会の人数は、各分科会から3~4名という話だが、それについては今日話す必要があるか」と質問があり、河川部が、「定員や分科会ごとのバランスまでは決めていない。アンケートを郵送するので、希望してもらいたい。ただし希望者があまり多いようだと、制限させていただくかもしれない」と回答したところ、団体委員から、「分科会だけでなく、地域ごとのバランスも考えてほしい」と意見があった。

続いて、座長から、「6月の第1回勉強会以降のタイムスケジュールについて、月に1回

ずつくらのペースでやって、今年度である程度素案をつくってしまうのか。また、勉強会には分科会のまとめ役に是非入って欲しいなどのこともあるのか」と質問があり、河川部は、「座長、副座長には是非入っていただきたいと思っている。また、河川整備計画とはどういうものかとかという話は既に何回もしており、そろそろ先に進みたいので、河川整備計画について、ある程度わかっている方に出ていただきたい。次回の流域連絡会までに2回はやって報告し、更に今年度最後の流域連絡会で報告できるようにということで、4回程度やりたい。そして、今年末には素案をつくりたい」と回答した。

これに対して、都民委員から、「今年中に素案をつくるというのは、あまりに急ではないか。そのための勉強会の責任は重いものがあるが、人数の選び方や定員などが不明瞭で心配だ」と意見があり、河川部は、「第二期から委員になっていただいた方もいらっしゃるが、第一期ではじめの段階からアンケート調査などで、いろんな意見を伺ってきた。それをもとにつくった案をまたお諮りするの、ある程度、意見を反映できるものができると考えている。今年からは、具体的な計画のかたちのものについて議論していきたい」と回答した。また、事務局も、「整備計画の素案を今年度中にまとめるというのは目標であり、そのためには開催回数よりも内容が重要だと思う。今後の分科会での意見も反映していく必要があり、策定日時が先に決まっているわけではない。平成13年から取り組んできて、そろそろこの辺で目標を持ってやりたいということなので、よろしく願いしたい」と付け加えた。これに対し、都民委員から、「改正された河川法に基づいて流域住民の声を吸い上げていくという作業だと思うので、あまり急がずじっくりと取り組んでもらいたい」と意見があり、座長が、「この流域連絡会は河川整備計画のためにあるのではないということは確認しているので、流域連絡会で本来あるべき野川の姿を追求し、それを河川整備計画の内容に活かしていきたい」とコメントした。

また、団体委員から、「勉強会の人数は制限する必要はない、希望者全員が入って良いと思う。その議論の中で、プロジェクトとして、河川整備計画に市民の声を反映させることに力を入れたいという方が決まってくると思う」と意見があった。

7 閉会

座長が、「今後は分科会ごとに日程を決めて、進めていくとことが確認されたので、よろしく願いしたい」とまとめた後、事務局から、今期も「野川のちびっ子先生あつまれ！」と題して小金井の南小学校と『野川の通信簿』を行う予定であること、5月15日に「第3回野川現場見学会」として、第一調節池の「どじょう池」から下流に向かって大沢コミュニティセンターまで歩き、野川中流部の現地見学を行うこと、今後は分科会ごとに活動を進め、次回の全体会は10～11月に予定していることが伝えられた。

最後に事務局から、「野川の課題解決に向けて、第一期を超えるような素晴らしい成果を期待したい」と挨拶があり、閉会となった。